蓮の花の運命

― 漢詩による　時空を超えた冒険 ―

市川桃子

二〇一七年十二月六日
神奈川近代文学館
主催　神奈川県漢詩連盟

北宋の李綱は「蓮花賦」を作り、ハスの美を六人の歴史上の美女にたとえて次のように歌っている。

綠水如鏡　紅裳影斜　乍疑西子　臨谿浣紗
菡萏初開　朱顔半酡　又如南威　夜飲朝歌
亭亭煙外　凝立委佗　又如洛神　羅韈凌波
天風徐來　妙響相磨　又如湘妃　瑟鼓雲和
嬌困無力　搖搖纖柯　又如戚姫　楚舞婆娑
風雨摧殘　飄零紅多　又如蔡女　蕩舟抵訶

綠水鏡の如し、紅裳影斜めなり。
乍ち西子の、谿に臨みて紗を浣うかと疑う。
菡萏初めて開き、朱顔半ば酡らむ。
又南威の、夜に飲み朝に歌うが如し。
亭亭として煙外に、凝立して委佗たり。
又洛神の、羅韈波を凌ぐが如し。
天風徐ろに来たりて、妙響相い磨す。
又湘妃の、雲和を瑟鼓するが如し。
嬌困して力無く、搖搖たる纖柯。
又戚姫の、楚舞して婆娑たるが如し。
風雨に摧殘せられ、飄零して紅多し。
又蔡女の、舟を蕩かして抵訶するが如し。

★最後の、蓮が傷んで寂しい情景を、美しいと感じるようになったのはいつからだろうか。まず、私たちの時空を超える旅は、この最後の句に焦点を当てて、出発することとしよう。

古代の描写

紀元前千年～五百年前

『詩經』「陳風　澤陂　第一章・第三章」

彼澤之陂　有蒲與荷
有美一人　傷如之何

彼の沢の陂に　蒲と荷と有り
美しき一人有り　傷めども之を如何せん

寤寐無爲　涕泗滂沱

寤寐に爲す無く　涕泗滂沱たり

彼澤之陂　有蒲菡萏
有美一人　碩大且儼

彼の沢の陂に　蒲と菡萏と有り
美しき一人有り　碩大にして且つ儼し

寤寐無爲　輾轉伏枕

寤寐に爲す無く　輾転として枕に伏す

紀元前三百年

『楚辭』　「離騷」

製芰荷以爲衣兮
集芙蓉以爲裳

芰荷を製りて以て衣を爲り
芙蓉を集めて以て裳を爲る

『楚辭』　「九章　思美人」

因芙蓉而爲媒兮
憚褰裳而濡足

芙蓉に因りて媒と爲さんとするも
裳を褰げて足を濡らすことを憚る

★この時代、単に、美しい、と鑑賞する作品はない。

ハスには、願いを成就する力、高貴性を表す力、仲立ちとなる力があると思われていた。

天への畏怖、造物者への畏怖が読み取れる。

前二〇六～後二二〇

吉瑞の植物。霊草。

漢・靈帝「招商歌」

涼風起兮日照渠
青荷晝偃葉夜舒
惟日不足樂有餘
清絲流管歌玉鳧
千年萬歲嘉難喻

涼風起こりて日は渠を照らす
青荷昼に偃し葉は夜に舒ぶ
惟れ日足らずして楽しみ余り有り
清糸流管　玉鳧を歌う
千年万歲　嘉は喩え難し

漢・閔鴻「芙蓉賦」

乃有芙蓉靈草
載育中川
竦修幹以陵波
建綠葉之規圓

乃ち芙蓉の霊草有り
載ち中川に育まる
修幹を竦てて以て波を陵ぎ
緑葉の規円を建つ

西暦二二〇―二六五

魏　曹植「芙蓉賦」

覽百卉之英茂
無斯華之獨靈

百卉の英茂を覽るに
斯の華の独霊無し

魏　劉楨「公讌詩」

芙蓉散其華

芙蓉　其の華を散らし

菡萏溢金塘　菡萏（かんたん）　金塘（きんとう）に溢（あふ）る
靈鳥宿水裔　靈鳥（れいちょう）　水裔（すいえい）に宿（やど）り
仁獸遊飛梁　仁獸（じんじゅう）　飛梁（ひりょう）に遊（あそ）ぶ

西暦二六五―三一六

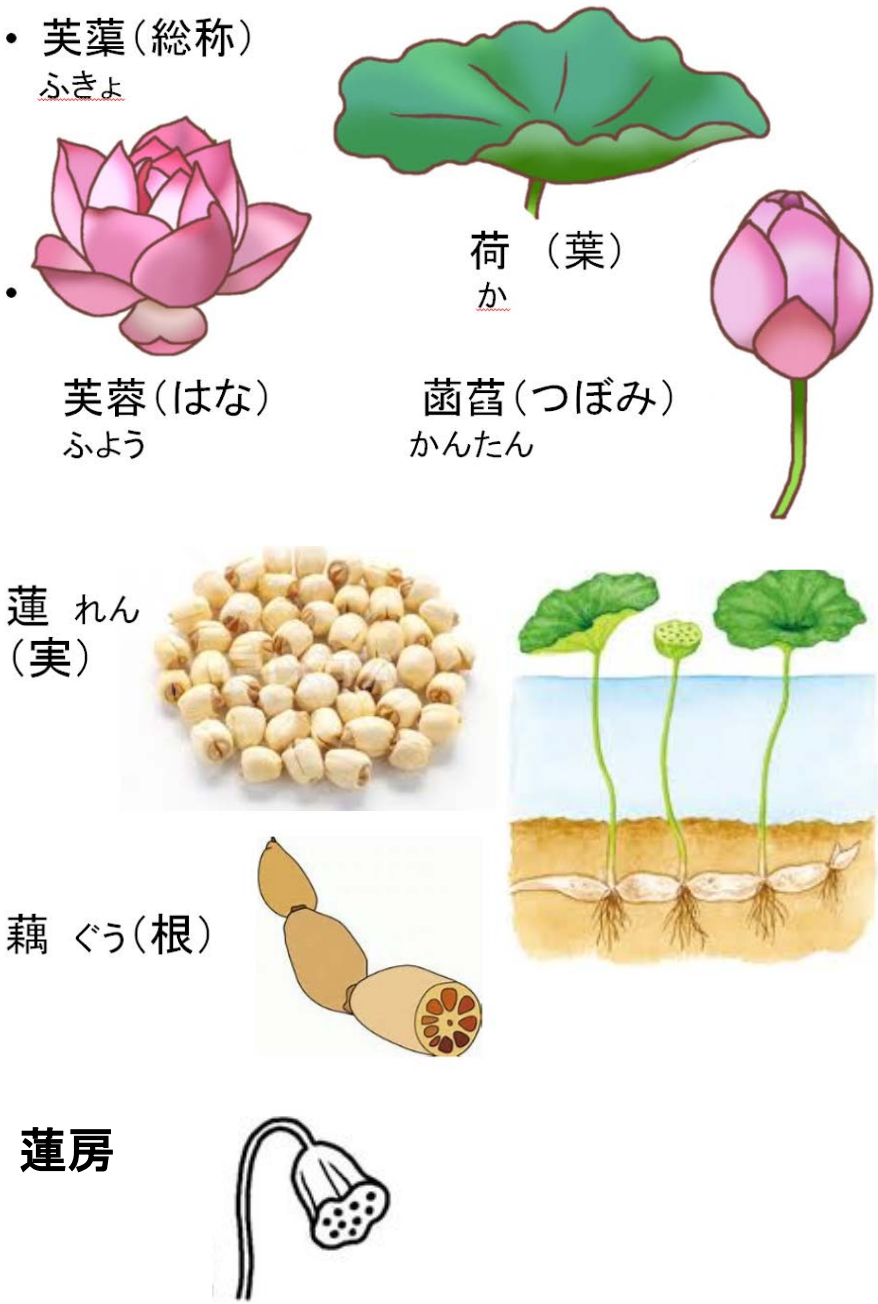
西晉　夏侯湛「芙蓉賦」

潛靈藕於玄泉　靈藕（れいぐう）を玄泉（げんせん）に潛（ひそ）め
擢修莖乎清波　修莖（しゅうけい）を清波（せいは）に擢（ぬき）んず

★ハス（芙蓉・菡萏）は、靈鳥、仁獸などとともに、吉慶の植物。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【ミニ知識】ハスの名称



【ハスの花】芙蓉（ふよう）　菡萏（かんたん）　蓮花（れんか）

荷花（かか）　藕花（ぐうか）　芙蕖（ふきょ）

六朝時代

秋の蓮　（盛衰の比喩）　東晋（三一七年―四二〇年）

東晋　陶潜「雑詩十二首」

榮華難久居
盛衰不可量
昔爲三春蕖
今作秋蓮房

榮華久しくは居り難し
盛衰量る可からず
昔三春の蕖と爲るも
今は秋の蓮房と作る

秋の蓮　（客観的な風景）　宋（四二〇～四七九）

宋　鮑照「代白紵曲」

窮秋九月荷葉黄
北風驅雁天雨霜
夜長酒多樂未央

窮秋九月　荷葉黄ばむ
北風雁を駆りて天霜を雨らす
夜長く酒多くして楽しみ未だ央きず

★　秋の寒々としたとした風景に対して、楽しい宴会を歌う。
比喩ではなく、風景として、枯れたハスが歌われる最初の作品。

衰荷の発見

斉（四七九～五〇二）

斉・謝朓「治宅」

結宇夕陰街　宇を結ぶ　夕陰街
荒幽横九曲　荒幽　九曲横たう
迢遞南川陽　迢遞たり　南川の陽
迤邐西山足　迤邐たり　西山の足
闢館臨秋風　館を闢きて秋風に臨み
敞窗望寒旭　窗を敞きて寒旭を望む
風碎池中荷　風は砕く　池中の荷
霜翦江南菉　霜は翦る　江南の菉
既無東都金　既に東都の金無し
且税東皋粟　且く東皋の粟を税らん

結城天鼓

【訳】夕陰街に家を建てた。荒れた光景にうねうねと河が流れている。遥かなる南川の北の地、果てなく連なる西山のすそ野。戸を開けば秋風が吹き入り、窓を開けば冷たい秋の朝日が見える。風は池の中の蓮の葉を砕き、霜は江南の水草を切る。もう、天子から賜った金はない。しばらく東皋で粟を作って税としておさめ、身を潜めていよう。

【鑑賞】作品全体の雰囲気に、ハスの景がしっくりと合っている。この寒々とした光景をより具体化するものとして、破れたハスの葉はふさわしい。対句が、表現としても洗練されている。結句は、典故を使って、権力者から身を避けることをいう。このとき、作者の心情も、蓮葉のように砕かれていたのかもしれない。

衰残の蓮

螢飛夜的的
蟲思夕喓喓
輕露沾懸井
浮煙入綺寮
檐重月没早
樹密風聲饒
池蓮翻罷葉
霜篠生寒條
端坐彌茲漏
離憂積此宵

梁　（五〇二～五五七）

螢飛びて夜に的的たり
虫思いて夕に喓喓たり
軽露は懸井を沾し
浮煙は綺寮に入る
檐重なりて月の没すること早し
樹は密にして風声饒し
池蓮罷葉を翻し
霜篠寒條を生ず
端坐して茲の漏に彌る
離憂此の宵に積む

梁・簡文帝「秋夜」

碎珠縈斷菊
殘絲繞折蓮

碎珠断菊に縈り
残糸折蓮を繞る

梁・庾信「和炅法師遊昆明池」

階蕙漸翻葉
池蓮稍罷花

階の蕙は漸く葉を翻し
池の蓮は稍花を罷む

梁　何遜「秋夕仰贈從兄寘南」

★斉の謝眺によって發見された衰荷の景は、梁の簡文帝を中心とする文学集団の嗜好に合い、彼らに支持されて、詩的風景として定着した。

唐代　（六一八～九〇七）

南北朝期に發見された衰荷の景は、それを繼承する形で唐代に書き繼がれ、独特の興趣と深さを持つ風景となっていく。

盛唐　（七一三～七六五）

（一）孤独感　杜甫（七一二～七七〇）

北池雲水闊　北池　雲水闊く
華館闌秋風　華館　秋風に闌く
獨鶴元依渚　独鶴　元より渚に依り
衰荷且映空　衰荷　且く空に映ず

杜甫　「陪鄭公秋晩北池臨眺」

蛟龍引子過　蛟龍　子を引きて過ぎ
芰荷逐花低　芰荷　花を逐いて低る

杜甫　「到村」

曲江蕭條秋氣高　曲江蕭條として秋氣高し
菱荷枯折隨風濤　菱荷枯折して風濤に隨う
遊子空嗟垂二毛　遊子　空しく嗟く　二毛の垂るるを
白石素沙亦相蕩　白石　素沙　亦た相い蕩く
哀鴻獨叫求其曹　哀鴻　独り叫びて其の曹を求む

杜甫　「曲江三章章五句之一」

★蕭條たる曲江を覆う菱荷は褐色に枯れ折れて風と波に空しく弄ばれている。その果てしない寂寥の中でただ一羽、曹を求めて鳴いている鴻は、知己を求めて叫ぶ作者の姿であり、衰荷の景は作者の心象風景でもある。

（二）蓮の音

盛唐・孟浩然（六八九～七四〇）

燭至螢光滅
荷枯雨滴聞

燭至りて螢光滅し
荷枯れて雨滴聞こゆ

盛唐・孟浩然　「初出關旅亭夜坐懐王大校書」

曾爲江客念江行
腸斷秋荷雨打聲

曾て江客となり　江行を念う
腸断す　秋荷に雨打つ声

中唐・李端　「荊門歌送兄赴夔州」

暝色投煙鳥
秋聲帶雨荷

暝色　煙に投ずる鳥
秋声　雨を帯ぶ荷

中唐・白居易　「潯陽秋懐贈許明府」

秋陰不散霜飛晩
留得枯荷聽雨聲

秋陰散ぜず　霜の飛ぶ晩
枯荷を留め得て雨声を聞く

晩唐・李商隠　「宿駱氏亭寄懐崔雍崔衮」

半夜竹窗雨
滿池荷葉聲

半夜　竹窗の雨
満池　荷葉の声

晩唐・温庭筠　「送人遊淮海」

★　孟浩然の発見になる荷雨の声は、後世の詩人に歌い継がれ、詩詞の重要な景物となる。

★　蓮破る　雨に力の　加はりて
青畝（一八九九～一九九二）

中唐　（七六六～八三五）

（三）　かすかな香り　　韋応物（七三六～七九一？）

【参考】これまでの作品では、次のように秋の池から香りが失われていた。

「蓮寒池不香　蓮寒くして池香らず」　　梁・鮑泉「秋日」

「香盡覺荷衰　香尽きて荷の衰うるを覚ゆ」　　北斉・蕭愨「和司徒」

韋応物が、人の衣を染められないほどかすかな香りを発見してから、蓮の残り香が歌われるようになった。

對殿含涼氣　　対殿は涼氣を含み
裁規覆清沼　　裁規は清沼を覆う
衰紅受露多　　衰紅露を受くること多く
餘馥依人少　　余馥人に依ること少なし

中唐・韋応物「慈恩寺南池秋荷詠」

閑門蔭堤柳　　閑門堤柳に蔭われ
秋渠含夕清　　秋渠夕清を含む
微風送荷氣　　微風荷氣を送り
坐客散塵纓　　坐客塵纓を散ず

中唐・韋応物「与韓庫部会王祠曹宅作」

樹遶池寛月影多　　樹は池の寛きを遶りて月影多し
村砧塢笛隔風蘿　　村の砧と塢の笛と風蘿に隔たる
西亭翠被餘香薄　　西亭の翠被余香薄し
一夜將愁向敗荷　　一夜愁いもて敗荷に向かう

晩唐・李商隠「夜冷」

（四）芙蓉死す……　詩語の誕生　→　新しい美意識の誕生

呉宮四面秋江水
江清露白芙蓉死

呉宮の四面　秋江の水
江清く露白くして芙蓉死す

張籍「呉宮怨」

章句慚非第一流
世間才子昔陪遊
呉宮已歎芙蓉死
邊月空悲蘆管秋

章句　第一流に非ざるを慚ず
世間の才子　昔　陪遊す
呉宮　已に歎ず　芙蓉の死
辺月　空しく悲しむ　蘆管の秋

劉禹錫「和令狐相公言懐寄河中楊少尹」

離宮散螢天似水
竹黄池冷芙蓉死

離宮に螢散じて　天　水に似たり
竹は黄ばみ　池は冷ややかにして　芙蓉死

李賀「九月」

試妾與君淚
両處滴池水
看取芙蓉花
今年爲誰死

試みに妾と君との涙もて
両処　池水に滴らせん
看取す　芙蓉の花
今年　誰が為に死せん

孟郊「怨詩」

高池高閣相連起
荷葉團團蓋秋水
主人已遠涼風生
舊客不來芙蓉死

高池高閣　相い連なりて起つ
荷葉団団として　秋水を蓋う
主人已に遠く　涼風生ず
旧客来たらずして　芙蓉死す

王建「主人故

池」

★「芙蓉死す」という詩語が生まれたことで、透明な世界の中で深紅の花が死んでゆく、というイメージの誕生。芙蓉に美人が投影されている。

ミニ知識　蓮と睡蓮（ハスとスイレン）　違いは？

蓮（ハス）

花　茎が長く空中で咲く

葉　茎が長い。切れ込みがない。

根（レンコン）　節がある。穴がある。

食用　蓮根。蓮の実（種）。茎。

栽培地　ヨーロッパには無い。

睡蓮（スイレン）

花　水の上に咲く。

葉　水面にはりついている。切れ込みがある。

根　わさびみたい。

食用　にはならない。花はまずい。根は固い。

栽培地　ヨーロッパにもある。

クロード･モネ　「睡蓮」一部

★ 次は、夏の歌。

六朝時代　四世紀

東晋・子夜歌（民歌）

信を遣れども歓は来らず　往きて自り復た出でず
金銅もて芙蓉を作るも　蓮子　何ぞ能く実らん

【訳】手紙（信）を送ってもあなた（歓）は来ない。
行ったきりもう出てこない。金や銅で蓮の花を作っても、
それには蓮の実はならない（愛しいあなたに実はない）

採蓮曲　梁・武帝（在位502-549）

遊戯五湖　採蓮歸
發花田葉　芳襲衣
為君儂歌　世所希
世所希　有如玉
江南弄　採蓮曲
採蓮渚　窈窕舞佳人

遊戯五湖　採蓮して帰る
発花田葉　芳りは衣を襲う
君の為に儂は歌う　世の希う
世の希う所玉の如き有り
江南弄　採蓮曲
採蓮の渚に　窈窕として佳人舞う

【訳】五湖で遊んで蓮の実を採って帰る。花開きつらなる葉に、香が衣につく。あなたの為に私は歌う。世の人の願うこと、世の人の願うこと。珠玉のようなもの。それは江南の歌、採蓮曲。

蓮の実を採る渚に、美しく佳人が舞う

★　采蓮：小さな舟に乗って、蓮房を集め、蓮の実を採る。採蓮曲は、その女性たちを歌った歌。多くの人がこの詩題で作っている。

唐代へ　八世紀

李白「採蓮曲」

若耶谿傍採蓮女　若耶谿の傍　採蓮の女
笑隔荷花共人語　笑いて荷花を隔てて人と共に語る
日照新妝水底明　日は新妝を照らして水底明らかに
風飄香袂空中舉　風は香袂を飄して空中に挙がる
岸上誰家遊冶郎　岸上　誰が家の遊冶郎、
三三五五映垂楊　三三五五垂楊に映ず
紫騮嘶入落花去　紫騮嘶きて落花に入りて去る
見此踟躕空斷腸　此れを見て踟躕して空しく断腸す

【訳】

若耶谿のそばで蓮の実を採る娘たち、
笑いながら蓮の花ごしに友達とおしゃべりをしている。
日の光はお化粧をしたばかりの娘を照らして水底まで明るく、
風は香りよいたもとをひるがえし、たもとは空中に舉がる。
岸の上では、どこの家の若者だろうか、三三五五しだれ柳のかげに見えた。
くりげの馬をいななかせ、ふりしきる落花の中へ入って行った。
それを見て行きつもどりつ、むなしく悲しい思いをした。

★　夏の明るい日差しを浴びて笑いながら蓮の実を採っている少女たち、勇ましく馬に乗って駆けていく若者たち。このように生命力にあふれた世界で、腸（はらわた）がちぎれんばかりに悲しむ人がいる。

李白「採蓮曲」の翻案詩

十七世紀　フランスへ

若耶の岸辺で　Sur les bords du Jo-yeh

エルベ・サン・ドニ　Hervey-Saint-Deny

若耶溪の岸で、若い娘たちが睡蓮の花を摘んでいる
花と葉の茂みが彼女たちを引き離す。彼女たちは笑い、顔を見ずに、楽しく会話をしている。
輝く太陽が、水底に、彼女たちのおしゃれな姿を映し出している。彼女たちの袖の中で香のついた風は、その軽やかな布を翻す。
だが、岸を散歩するこの美しい若者たちは誰であろうか。三三、五五、彼らはしだれ柳の間に現れる。突然、一人の馬が嘶いて、遠ざかる、足下の落花を踏みつけて。
それを見て若い娘たちの一人が心の動揺を隠し、その心臓の動悸が現れるままになっている。

Sur les bords du Jo-yeh, les jeunes filles cueillent la fleur du nénuphar.
Des touffes de fleurs et de feuilles les séparent;
elles rient et, sans se voir, échangent de gais propos.
Un brillant soleil reflète au fond de l'eau leurs coquettes parures;
le vent, qui se parfume dans leurs manches, en soulève le tissu léger.
Mais quels sont ces beaux jeunes gens qui se promènent sur la rive?
Trois par trois, cinq par cinq, ils apparaissent entre les saules pleureurs.
Tout à coup le cheval de l'un d'eux hennit et s'éloigne,
en foulant aux pieds les fleurs tombées.
Ce que voyant, l'une des jeunes filles semble interdite,

se trouble, et laisse percer l'agitation de son cœur.

★　蓮は、睡蓮に姿を変えた。　中国で蓮の実を摘んでいた少女たちは、フランスでは睡蓮の花を摘んでおしゃべりをしている。

岸辺で　**Am Ufer**

ハンス・ベトケ Hans Bethge

若き乙女たちが岸辺で睡蓮の花を摘む。灌木の間、葉叢の間に彼女たちは座り、花を集め、ひざに花を集め、そして　たがいに戯れ言をいう。黄金の日差しがその姿を織りなしまた彼女らを輝く水面に映し出す。

彼女たちの衣裳と、彼女たちのやさしい眼差しとを。そして風が袖の布を愛撫して吹き上げ、そしてその芳香の魔力を空中に漂わせる。

見よ！　なんと美しき若者たちが岸辺で勇ましい馬に騎って駆けていることか。しだれ柳の葉叢のなかに、早足で悠然と駆けてくる。馬が一頭、嘶き、興奮し、うなりをたてて疾駆していく、倒れた花々を踏みしだいて。

乙女のうちでもっとも美しい者が長い間不安な眼差しで彼を見つめている。彼女の誇り高い態度は偽りに過ぎない。　見開いた眼のきらめきには、高ぶった心の嘆きの声が。

Junge Mädchen pflücken Lotosblumen. an dem Uferrande.
Zwischen Büschen, zwischen Blättern sitzen sie und sammeln Blüten, Blüten in den Schoß und rufen
Sich einander Neckereien zu.　Goldne Sonne webt um die Gestalten, Spiegelt sie im blanken
Wasser wieder,　ihre Kleider, ihre süßen Augen,　und der Wind hebt kosend das Gewebe
Ihre Ärmel auf und führt den Zauber ihre Wohlgerüche durch die Luft.
　Sich, was tummeln sich für schöne Knaben an dem Uferrand auf mutigen Rossen?
Zwischen de Geäst der Trauerweiden　traben sie einher. Das Roß des Einen　Wiehert auf
Und scheut und saust dahin und zerstampft die hingesunkenen Blüten.
　Und die schönste von den Jungfraun sendet lange Blicke ihm der Sorge nach.
Ihre stolze Haltung ist nur Lüge: in dem Funkeln ihrer großen Augen
Wehklagt die Erregung ihres Herzens.

★　睡蓮の花が咲く池は夏の日差しを受けて輝き、水面には、黄金の日差しに織りなされた少女たちの姿が映っている。

「大地の歌」第四楽章「美について」　　独・グスタフ・マーラー

【訳と構成】

A：【蓮の実を取る少女達、その様子】

若い乙女たちが花を摘む。岸辺で睡蓮の花を摘む。
灌木と葉叢の間に坐って、ひざに花を集めそして、たがいに戯れ言をいう。
黄金色の日差しがその姿を織りなし、彼女たちを輝く水面に映し出す。
陽は彼女らのほっそりした肢体を映す。彼女らの愛らしき眼差しもまた。

B：【騎馬の若者たちの出現】

おお見よ、なんと美しい若者達が、かしこの岸の上で猛（たけ）き馬に騎り
陽光のごとく輝かしく　もう新緑の柳の葉叢の中へ
生き生きとした若者たちが駆けてくる　馬が一頭疾駆してくる
いななき、興奮し、うなりをたてて。蹄になびく花の、草のうえを　倒れ
た花々を突然の嵐のごとく踏みしだいて
そのたてがみは喜びにはためく　鼻孔から熱い息を吐いて

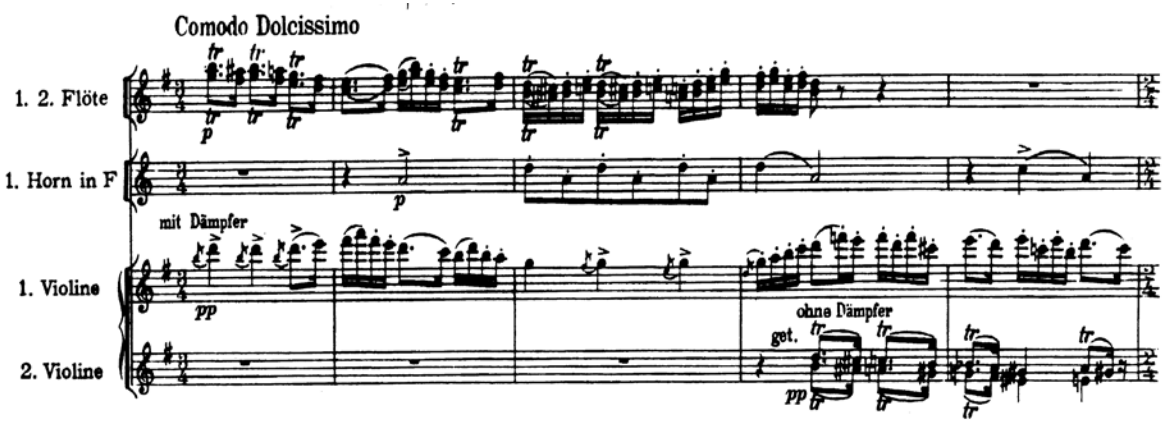
C：【騎馬の群れが去ったあと】

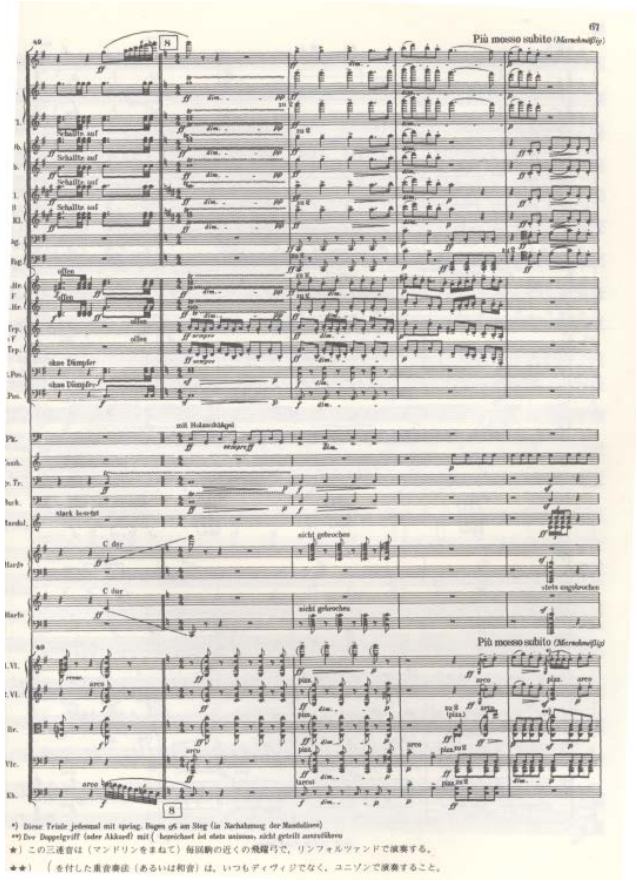
黄金色の日差しがその姿を織りなし、彼女たちを輝く水面に映し出す
乙女の内で最も美しい者が、長い間あこがれの眼差しで彼を見つめる。
彼女の誇り高い態度は偽りに過ぎない。見開いた眼のきらめきに、
熱い視線の闇に高ぶった心の嘆きの声が揺れ残る

★題名が「美について」に変わっている。黄金の日差しが輝く水面の睡蓮と、無邪気な少女たちが作り出す世界は、この世に出現した美の世界である。しかし、突然の闖入者が去った後、その美の世界に悲しみが宿る。

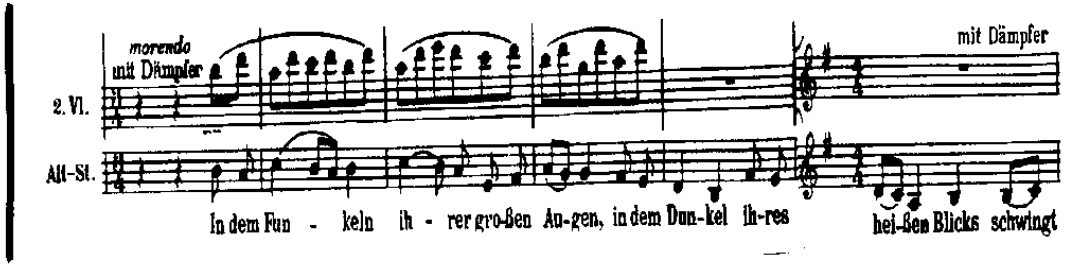
A 部‥冒頭　　黄金の輝き

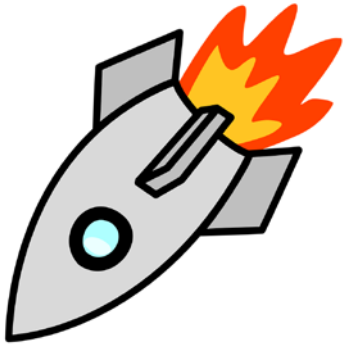
B 部‥騎馬の群れの騒がしさ





C 部‥A 部と同じプレーズが、　下降し、消えていく。





二〇一七年十二月六日十六時
我々は、時空を超えた冒険から
無事に帰還しました。

振り返れば、何千年もの間に、蓮は、霊的な植物から、風情のある植物に、孤独な悲しみを宿す植物に、そしてついには、睡蓮へと姿を変えていきました。そして、何千年もの間、蓮に籠める人々の思いは受け継がれてきました。

蓮は、先人たちの思いを込めた花として私たちの前に現れます。時には死者に捧げる聖なる物として、時には俳句の季語の敗荷として、時には悲しい美女の姿となって、さらに、地上に再現された美の世界として。

蓮の運命を追ってきた私たちの旅、楽しい旅だったでしょうか。

さあ、私たちは、時空を超えて、いつにでも、どこにでも、出かけていくことができます。　また、お会いしましょう。

「李白を読む会」
毎月　第④金曜日　一時
湯島聖堂　（JR お茶の水駅）
電話　〇三―三二五一―四六〇六

「漢詩入門（漢詩の歴史）」
毎月　第①土曜日　十一時
毎日文化センター　（東西線　竹橋駅）
電話　〇三―三二一三―四七六八